

四歳児

十月第一週の実践記録



村田修子

衣更えといわれる十月の声を聞くと、気候も安定してくるためか、幼児の態度もしつとりと落ち着いてきて、「何をやる」というように行動が目的にややつながりを持ってきたり、「やって楽しむ」という気が感じられてくる。

その時期にちょうど運動会という行事が大きな重みを占めている。子どもたちはその大変そうな運動会を楽しみに待ちながら、その反面、いろいろなことを覚え、しかもみんなと一しよに整った形にしなければならぬので、そこに自分を押えてがまんすることが要求されるので、子どもの心の中にもやりたいことを中断される不満とあきらめと、しなければならぬ責任感にも似たような気持が感じられて、苦笑させられるのが毎年のことである。

そこで運動会をきっかけにして、戸外で運動をする機会を多く作り、簡単なルールのある遊びをみんなで楽しむのがわかって、進んで参加するような気分を作り上げるようにしたい。ねらいはそこにあっても、なかなか目的に到達しないで、かえって反対の方向にむいてしまった一週間をとり上げてみる。

十月二日(月)雨

「一日を通じての記録」

予定(話し合い、運動会の紙芝居、音楽リズム)

運動会にそなえて、春の運動会るとき使った紅白の帽子を、家から持ってきて引出しの中に入れておくように、前週の土曜日に伝えてあったので大部分の子どもが持ってきて「これどうするの」と聞いたり、たしかに持ってきた、ということを示してくる。またすぐにかぶって活動が始まる。家から何か持ってきたり提出物のとき、たいていきちんといかない子どもがあるが、子どもによつては、「おかあさんに言ったのに忘れて入れてくれなかった」と困ったように、悪そうに言う。そういう言葉を聞くと子どもには「明日でもいいのよ、おかあさんはきつと忙しかったのよ」とかばってやるが、親に何とかひとこと言いたい気持になる。こういう物的な刺激があると、遊びが活発になる。あいにく雨なので遊戯室で帽子をかぶってはしり廻っている子どもが多い。

指折り数えてみると何日もない運動会までに、一応あれもこれも覚えさせて形を整えなければならぬ教師にとっては、何となく気がせいいて、帽子をかぶって走り廻っている姿をほほえましいとばかり言っていられないので、みんなの遊びが佳境に入らない前に、集まって話し合いや運動会に關係のある紙芝居「いたくはないの」を導入として使い、全員を、自分たちも運動会をするのだ、という気持ちにさせようと思ひ九時四十分頃へやに集める。

話し合いは、先ず昨日あったことについてひとりずつで前へ出て皆に話をする。前へ出ると大きい声で言えないし、聞くほうもむずかしいので、五人位がせいぜいである。小さい声の子どもは要点を反復して助けてやったり、積極的な子どもばかりにならないように配慮する。今日はよく聞いていた一人が「そこへ誰と聞いたの？」と言葉をはさんだので「そういうように聞いてみるとよくわかるわね」と言ったことが刺激となって「それはどこにあるか」「どうやっていったのか」「それからどうしたか」というように質問することがおもしろくなつてしまつて、かなり長い間話し合いが続いた。

「今度は紙芝居をしましょう」というと歓声が上がると。

すんでから春の運動会、父親の勤め先の運動会について話はずむ。今度のは小学校の人たちと一しょで、「みんなはこういうおゆうぎをするのよ」と大体を話すと、お母さまと一しょにする

ゆうぎのことに一番関心が集まる。その反応はいろいろでもしろい。恥ずかしい、という子、親のほうができるだろうかと心配する子、自分が教えてあげると張り切る子、左右の子と顔を見合せてウフフフ……と笑う人など。

「それではお母さまに教えてあげてね」と言うとき、みな、うんとうなづく。ただ一人Iちゃんは「一べんじゃだめかもしれない」と心配する。だんだんに覚えればよいことを話して、「どじょっこふなっこ」の曲をひくと何人かが「知っている」と顔を輝かす。ラララ、でわかっているところだけうたったり、拍手をしたり、四季のことを歌っていることを話したり、座ったままでできる簡単な動作をしたりなど変化させた扱いをして何回も全体をつかませるようにしていると、ちょうど遊戯室を使える順番がきたので、手洗にいつてから並んで広いところへいく。

先ず機敏に反応するように、音がしたら椅子から早く立つ、こんなこともおもしろくてたまらない、それから歩いたり走ったり急に止まったりしゃがんだり、いろいろ変化をつけて基礎的な動きをしてからさっきのうたについて「みんなはどじょやふなになって泳ぐのよ」というとすぐそのようなかっこうをして泳ぎ廻る。

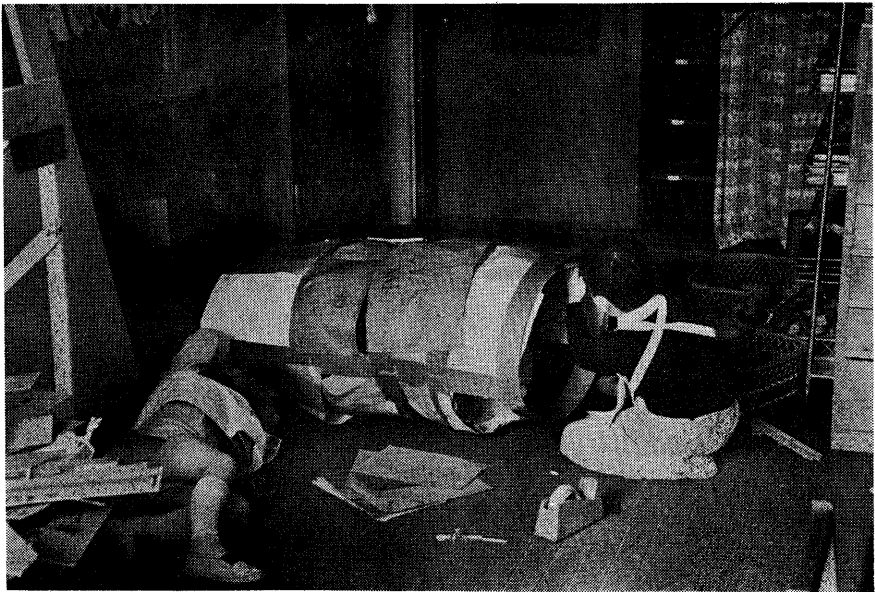
「お母さまはまわりで池になるから、先生が一人でそれをしてみましょうか」というと、「いるつもりか」とIちゃんが、ぼつ

りという。子どものほうの動きとしては変化はないので、二回位してフォークダンスやスキップをしてからへやに帰る。

朝からずっとしぼりつけておいたような形になったので、みんな自分のやりたいことにとびついていく。

何人かは飛行機作りに余念がない。その会話……「いいのよ」「たね」「サンダーバード一号だよ」「かっこいい」「どうやって作るの」等、聞いていると集団の中でのものごとのはこびをのみこみ、自分のあり方などが身についてきた感じである。

十一時半、お当番の人に手伝ってもらって食事前のお盆や机をふいてからみんなに知らせてもらう。食事の仕度も既に手順よく運ぶようになってきているけれども、Mちゃんのようにうがいを忘れ、手を洗っただけで水道のところから離れていく子もあるの
で注意していなければならない。食事の挨拶はお当番が一番張り切るときである。食事がすみ、一時から全員でする体操になるまでの間の自由遊びは、朝のそれとは違ってすぐに遊びに入っていく。一時になると園全体にレコードが流れる。みんなばね仕掛のお人形のように走り出して各組の前に二列に並ぶ。夢中になって集まるところが可愛い。女の人の列の方がいつもじょうずである。体操がすんでから庭中を行進してへやに帰り、片づけをしてから当番の人は挨拶をし先頭になって並んで帰る。今日は雨でへやの中だけだったせいもあるが、何か心せわしい一日だった。



細長い丈夫な紙で組み立てたロケットの仕上げ

十月三日(火) 朝雨、のち曇

「計画と反対の方へ向かった活動を中心として」

今日は新しい歌や運動会にするときのものをしよう、と予定していたが、昨日一日は自分の思ったことが十分にできなかったせいか、登園してきてから男の子は画用紙で飛行機作りに余念がなく、女の子たちは遊戯室で活発に遊んだり、遊びに使う為にお面を作ったりして、それが次第に交代してうまく流れている。一年のうちに何日とないよいふん囲気なのでその状態を続ける。十時四十分頃それがややだれてきたので、みんなで集まり今まで作った飛行機をみながら、「飛行場を作って並べるのどうかしら」と持ちかけると「賛成」とか「先生っていいこと言うじゃないの」等思わず笑ってしまうようなことを言う。普段女の人の製作活動に、この種類のものは出てこないの、どうするかという私の好奇心も手伝って、みんなで飛行機作りをすることにもっていく。

その結果、女の子の大部分が困ったような態度をしたこと、まだでき上がったものは、いわゆる観念的な飛行機が多くでき上がったので、男児と女兒の関心の違いをはっきりと見ることができた。男の人は、自分たちがしているものをみんなで作り上げようという計画にすっかり張り切ってしまった。次から次へと変化をつけ、また違うものを考えたりして、割合に時間がかかってしまう。今日は帰りの前に「おみやげにんじん」の曲をひいて拍手し

たり、何の動物の出てくる歌かなどの話し合いをしていた。

十月四日(水) 晴

「その二」

朝起きてからすぐに男の子だけ飛行機作りをし、女の子は久しぶりの外遊びを楽しんでいる。赤帽をかぶっての低鉄棒や砂場遊びもよい光景である。今日は遊戯室を使うのが早い順番の日なので、九時三十分頃からみんなで行って昨日の歌を歌い、また歌いながらにんじんをふり廻すようすやたべるようすをしてだんだんに覚えるように仕向ける。遊戯室での楽しみはスキップをするこどらじい。一人ずつみんなの前ですることはほこらしい気持ちになるためか、とても張り切って足がもつれることさえある。それぞれのテンポが違うのである人に合わせてピアノをひいてあげる。保育室に帰る前に「へやに帰ったら昨日作った飛行機を並べる飛行場を考えて作るから、まだ足りないものがあつたら作りましようか」と持ちかけると、飛行場にあるいろいろのものをあげる。ビル、見る人、自動車、荷物を運ぶ車など、それでへやに帰ると、そういうものを作る気に十分なので活動がすぐ始まる。私はたくさんにできた飛行機に紐をつけて、へやの一角に張った紐にむすびつけて、立体的に飾り出した。子どもたちはそれを見て、ますます一つのものを作ろうという気分が盛り上がり

てきたようであった。いつも見るテレビの人形劇も今日は見ずに十一時半の帰る時間がきてしまう。

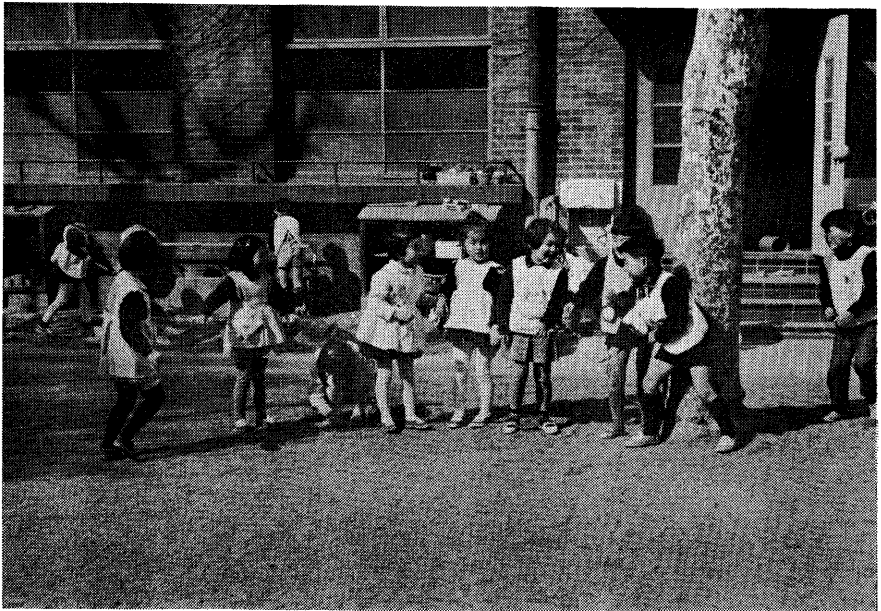
十月五日（木）曇

「実習生の指導の一日を中心として」

Tさんは近づいた運動会にそなえて、へやを飾る万国旗（半紙四分の一）を作ることと、運動会でするものの歌を歌う予定をたてていた。

登園してきた人から誘導して何をするか説明してマジックインキで書く、人数が多くなってくると、新しくきた人に対してこの働き掛けが少なくなるので、参加しそびれてしまう人が七名位できてしまう。こういう保育形態の場合はなれないうちはどうしても目の届かない人ができてしまい易い。そしてその結果でき上がったものは割合に雑なのが多いように感じられる。これはそのつど注意しなければならぬのだが、実習生はその点を省略するのようになってしまう。本を見て正確に書く人、かわいい絵のついた旗などたくさんでき上がったが、その中に、Uの字のまわりに星のついたユニバーシアードの旗が三枚位できた。身近な環境設定の大切さと、幼児といえども世の中とのつながりのあることを身近に感じた。

実習日のおとなの手の多いときは、子どもの態度が雑な



現在はみんなまざって遊ぶようになった

感じになる。そういうふん囲気で「おかえり」になる。

十月六日（金）曇のち晴

「飛行場作りを中心として」

昨日作った旗をへやに張りめぐらしておいたら、来た人から歓声をあげて自分のを探す。そして旗のついていない部分にも張ろう、というふん囲気になる。早速その思いつきをほめると、みんなで旗作りが始まる。女の人は全くいいねいに作っているが、こういう平面的なものになると男の人は正反対。それが自分たちで相談して製作活動の始まったときはその思いつきの奇抜き、細かい点までいいねいに、思い通りでき上がるまで長い時間かかってもやるので、こういう点が原因なのか、男の人と女の人はつきり分かれてしまう。この融和が現在一番の問題である。

飛行機をさげた下に紙を敷き、飛行機を並べていると、まわりにはいた人が既に作ったものを持ってきて適当に並べてくれる。外遊びをしていた人も段々にへやにきたと思ったら、三人ほど紙の上にながりこんで、あつという間に滑走路、見る人のいるところ等と区切ってしまった。相談せずにやったため線がくい違ったりしてやや乱雑な感じはするが、平面的だった飛行場に活気ができた。やり終わって眺めたみんなの顔は安心したようであり、特に男の人は満足気である。これは飾っておいて見てもらうことにする。

十月七日（土）雨のち曇

「外での集団遊びを中心として」

朝、家の人が飛行場を見にくる。五歳児もききつけてきて一応文句をいったり「なかなかかっこういいじゃない」などといわれ、て首をすくめたりしている。

運動会が近いのに一向気分が盛り上がっていないので、今日は一日赤帽白帽をかぶってみんなで遊ぶ計画をたてる。庭に出られるようになってからまず折り返しリレーをする。すんだ人は何回もうしろにつき、いつ終わるか分からないリレーの次に、紅白球でたま入れをする。これが宙にとびかうと何となく運動会の気分がする。このときビーツと笛でも吹いてやると一層活気ができる。これらを十分にやったあとは、みんな帽子をかぶったままぼらんこに低鉄棒に草つみに、というように戸外での活動が展開される。先生の心のおせりをよそに、この何日か思わぬ活動に盛り上がりを見せたが帰りの前に運動会でする歌などやってみたが何回もしなかったそれらを一応のみこんでいたのには驚いてしまった。やはり他の組の人のしていることをそれとなく聞いたり、運動会でするもの、という関心があるせいなのだろうと思つたし、おとなと同じように、今はどうしてもこれをしなければと思うようなどきに関係のないことがやりたくなることが子どもにもあるのだろうと思ひながらすこした一週間であった。